



Title	『ラパチニの娘』をどう読むか : アメリカ的主題の発見
Author(s)	大井, 浩二
Citation	大阪外大英米研究. 1968, 6, p. 49-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98976
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ラパチニの娘』をどう読むか

——アメリカ的主題の発見——

大 井 浩 二

ホーソンが1844年に発表した『ラパチニの娘』(“Rappaccini's Daughter”)が、彼のもっとも重要な短篇のひとつであることは否定できない。ある批評家などは、この作品が「ホーソンの短篇のなかでもっとも難解である」ことを指摘しているし、「この物語はあまりに複雑で、あまりに意味が豊かであるために完全に満足できる分析は不可能である」という評言さえも聞かれる。『ラパチニの娘』に描かれている事件が「常識ではどうも考えられない」ことを認めながら、「その底を流れているテーマ」が「広く十分に納得できるように物語のなかに具体化され、われわれ自身の人間経験の一部となっている」ことを主張する学者もいる。⁽¹⁾単にホーソンの傑作というばかりでなく、アメリカ文学全般からいっても、相当に高い評価があたえられている作品と言い切ってもよい。同時にまた、この短篇がホーソン研究家にとって、避けることのできない難関といった印象さえ受ける現状ではないだろうか。それほどに『ラパチニの娘』は読者の努力を要求する作品なのである。

当然のことながら、この作品には実にさまざまな解釈が加えられている。そのすべてを紹介するだけでかなりのスペースをとられてしまうことになるだろうが、物語の主題、人物描写、材源、構造、象徴、アレゴリー、その他ありとあらゆる角度からの分析がふんだんになされている。そう長くもない短篇をめぐって、主人公がだれであろうかなどという議論がたたかわされるということ自体、かなり異常なことではあるまいか。考えられるかぎりのアプローチがなしつくされたかに思われる現在、なおかつ僕が『ラパチニの娘』論を試みようというのは、かなりむこう見ずな実験といわれるかもしれないことは覚悟してい

る。だが、この作品にかぎらず、ホーソン批評一般において、あまりにも作品に密着するか、さもなくば作者と作品との関連性に注意をむけすぎるか、という二つの極端な傾向がありはしないか。いわゆる「新批評」的な分析では、19世紀半ばに生きていたアメリカ人ホーソンが忘れられてしまっている。また逆に、ホーソンの「芸術家観」を作品のなかに探ったり、「心理的主題」を追求しようとする最近のいくつかの研究では、ホーソン個人と作品とのからみ合いは明らかになっても、依然として19世紀のアメリカ人というホーソンの時代性、ないしはアメリカ性は抜け落ちてしまうことになる。僕としては、ホーソンの作品を微細に分析しながら、同時にまた彼の置かれていた時代的背景との関係を考慮すべきではないかと考える。彼が意識するしないにかかわらず、その作品には彼の生きていた時代のさまざまな問題が影を落としているのではないか。ホーソンを読むにあたって、その作品全体を鋭敏な感覚を備えた知識人ホーソンが書き残した一種の cultural documents とみなすことを主張したい大げさな言い方をするならば、ホーソンの作品にみられる「文化的象徴」の追求を僕の第一の課題にしようというのである。⁽³⁾

こうした主張は僕らのホーソンが一般読者にあたえている印象からいって、いかにも見当ちがいに思われるかもしれない。過去の世界ばかり扱っている苔むした作家ホーソンが19世紀のアメリカの「現実」を、かりに象徴的にせよ、反映しているという考えは、どうにも受け入れ難いものであるだろう。いや、一般読者ばかりか、あの『アメリカ思想の主流』の著者 V.L.パーリントンはホーソンが「永久に影を扱っていた」ことを指摘し、彼が「現実」からもっとも隔離された作家であって、「ニューイングランドの想像力」を麻痺させた張本人であると非難していたことを思い出す。⁽⁴⁾ たしかに、ホーソンの作品が時間的・空間的にもアメリカの「現実」を直接には反映していないことを認めねばならない。だが、ホーソン自身、彼の『トワイヌ・トールド・テールズ』について、そこに収録された作品群が「世間と交渉を開こうとする試み」であることを主張していたのではなかったか。彼の「象徴的態度」を論じたファイ

デルソン教授は「一見、ホーソン独自の気質に由来する、きわめて個人的な問題と思われるものが、時代の問題の反映であることが判明する⁽⁵⁾」と書いている。いずれにせよ、ここではホーソンにアメリカ独自の「文化的象徴」を探ることが可能であるという立場をとりたい。そのための材料として、『ラパチニの娘』をとりあげようというのである。とはいうものの、この短篇ほどに非現実的、非アメリカ的な作品もほかに例がないのではないか。ホーソンの作品系列において、『大理石の牧神像』をのぞく、ほかの長篇、ハリー・レヴィン教授のいわゆる「ニューイングランド三部作」⁽⁶⁾は、アメリカが舞台となっている点では、過去と現在に重点の相違はあっても共通している。『ぼくの親類モリノー少佐』や『若きグッドマン・ブラウン』、『イーサン・ブランド』、『メリー・マウントの五月柱』などの代表的な短篇でも、アメリカ的な舞台の上に物語が展開することは明らかである。だが、この『ラパチニの娘』の場合には、「ずっと昔」(very long ago) という時間設定であり、場所もイタリアのパデュアの町となっている。しかも、魔法使いめいた科学者の娘をめぐる青年の恋物語というのであるから、そこにホーソンの生きていた19世紀半ばのアメリカの「現実」が反映しているなどという主張は、どうみても始めから成立しようがないかに思われる。ホーソン自身この短篇につけたユーモラスな序文のなかで、彼の作品一般が「時間や空間とまず関連がない」ことを認めていて、『ラパチニの娘』の場合とても例外でないと考えていい。と同時にまた、彼の作品は「読者がまさにしかるべき視点から眺めるならば、もっと立派な作家のものに劣らず余暇の楽しみとなるであろうし、その逆の場合にはとてつもないたわ言に思われることは間違いない」とも記していたことを忘れることはできない。この「時間」や「空間」の点でいささかもアメリカ的でないと思われる『ラパチニの娘』は、いかなる「視点」から読めばいいのであろうか。どういう形でアメリカ文化に固有の問題がひそんでいるのであろうか。

まず冒頭において、読者は物語の主要人物のひとりであるジョヴァンニ・ガスコンティ (Giovanni Guasconti) に紹介される。彼は「イタリアの南部」か

らパデューア大学に勉強にきた学生で、懐中にはわずかし金銭の持ち合わせがない。やっと占めかしい屋敷に下宿することになったのだが、「生れてはじめて生れ故郷をはなれた若者」に似つかわしく、ホームシックにかかっている様子である。こういったホーソンの説明を読みすすめるうちに、僕らの心には、いかにも平凡で素朴な青年のイメージが刻みこまれている。ある点では、親類の援助を求めて田舎を出てきた『ぼくの親類モリノー少佐』の主人公ロビンを思わせる登場ぶりともいえよう。その意味からいえば、トリリング教授好みの「田舎生れの若者」(the Young Man from the Provinces)⁽⁷⁾というタイプにぴったりの人物とも考えられる。実はジョヴァンニ青年はナポリの生れであるから、「田舎生れ」というのは正確ではないとしても、世間知らずの「若い他所者」(the young stranger)という設定を見落としてはなるまい。あの『赤と黒』や『ゴリオ爺さん』、さらに『大いなる遺産』などに登場する「田舎生れの若者」と比較してみても、『ラパチニの娘』のジョヴァンニの経験は決して見劣りのするものではない。事実、この短篇のすべては、この若者の異常な体験の描出にあてられているといっても過言ではないのだ。

さて、ジョヴァンニ青年はたまたま下宿の窓から見える美しい庭に注意をひかれる。そこでは「パデューアの太陽の輝き」が、彼の故郷ナポリほどではないにしても、やはり「南イタリアにおとらず楽しげである」のに気づく。やがてこの庭が有名な科学者ジャコモ・ラパチニ (Giacomo Rappaccini) 博士の所有物であること、世界最古といってもよいほどに古い時代からあったことなどが明らかにされてゆく。そこには美しい花が咲き乱れているばかりでなく、中央には永遠の歌をうたいつづけているかのような噴水もある。窓から見おろしているジョヴァンニの眼に、「背の高い、やせて顔色の悪い、病人のような男」の姿が映るが、これが他ならぬラパチニ博士であり、父親の手助けをしている娘ビアトリス (Beatrice) は咲き乱れる花に劣らず美しい。この娘にジョヴァンニが妖しい魅力を感じることは言うまでもないとして、『ラパチニの娘』全体の雰囲気は最初の2、3ページ足らずですっかり出来あがっていると考えられ

る。異様な科学者とその娘。咲きほこる紫色の花々。いかにもエキゾティックな世界であるとしても、読者としてはホーソンが作品全体の舞台として、「庭園」をもちこんでいる事実には、まず眼をとめねばなるまい。

ある論者は「庭園」が「この短篇の最初の重要箇所である」ことを指摘しているが、このラパチニ博士の庭が「比喩的にエデンの園と結びついている」ことは、ホーソンの説明から充分に理解できる。これが「現代世界のエデン」

(the Eden of the present world) ではあるまいか、というのが、ほかならぬジョヴァンニ青年の印象であったのだ。医療用の毒草に手入れをしているラパチニ博士が「不安げな様子」を示しているのは、「青年の想像力には奇妙にゾットとするものであった」にもかかわらず、やはり庭いじりの仕事が「人類の墮落以前の両親の喜びであり、勤労であった」ことを思い浮べ、ラパチニこそは「現代世界のエデン」のアダムであろうと考えるのである。ジョヴァンニは窓の下「庭園」全体になにか「奇妙な危険」がひそんでいるのを感じるものの、翌朝になると、そうした心配は跡かたもなくなっている。「最初の太陽の光」のなかで、庭には露が光り輝き、珍しい花々はどれも美しく咲きほこっている。なにかもかが「現実的」で「当然に」思われ、「普通の経験の範囲内」にあるというほかはない。青年は「不毛な都会」のなかに「美しい豪華な草木のある場所」を見おろすことに喜びを感じとるばかりで、それが「彼に自然とのコミュニオンをつづけさせる象徴的な言葉」ではないかとさえ考えるようになってくる。

こうしたホーソンの「庭園」ないしは「自然」に対する強調を理解するためには、どうしても『ラパチニの娘』にアメリカ的な枠組を設定しなければならない。これまで多くの人がくりかえし指摘しているように、アメリカ人にとって手つかずの「自然」はたえず憧れの対象であった。いや、アメリカそのものを一つの「庭園」として考える態度は、アメリカ大陸の発見以来、ヨーロッパ人の心のなかに巣くっていたといえるかもしれない。「庭園としてのアメリカのイメージ」がアメリカ自身のなかにたえず生きつづけていることは、たとえ

ばH.N.スミス教授の「庭園の神話」(the myth of the garden) をもち出すまでもなく明らかであるだろう。⁽⁹⁾ いずれにしても、ホーソンが『ラパチニの娘』の冒頭において、青年ジョヴァンニの「庭園」への反応を描きこんでいる事実は、イタリア的な背景にもかかわらず、平均的なアメリカ人に一般的な態度を暗示しているのではあるまいか。パデュアの町の「庭園」というきわめて限定された状況ではありながら、緑したたるラパチニの「自然」に接したジョヴァンニの喜びは、ある意味ではアメリカ大陸を「すばらしき新世界」と感じた人々のそれに共通していると考えたい。ここで『偉大なるギャッピー』の結末を思い出してもいい。あの「かつてオランダの船乗りたちの眼に花の如く映ったこの島の昔の姿——新世界のういういしい緑の胸」という表現にみられるイメージは、ほかならぬ「庭園」としてのアメリカを伝えているとはいえないか。「この大陸を前にした時」、人間が「自分では理解も欲求もしない美的瞑想に否応なく惹きこまれて、つかの間、恍惚と息を呑んだに違いない」(野崎孝訳)という描写は、そのままラパチニの「庭園」を前にしたジョヴァンニ青年の気持ちにもあてはまるといえば、あまりにも身勝手な連想ととがめられるだろうか。いずれにしても、読者としては『ラパチニの娘』の基底にきわめてアメリカ的な「庭園の神話」が導入されていることを確認し、物語全体をアメリカ的な枠組において読みとることの可能性を発見せねばならなくなってくる。

ところが、読者は『ラパチニの娘』を読みすすめるうちに、あの「現代世界のエデン」が、実はきわめて危険な人工庭園にほかならぬことがわかってくる。すでに最初からジョヴァンニ青年もうすうすと感じていたことだが、この古めかしい庭にはどこか異様な空気が漂っていた。庭仕事に精出す博士の「態度」は「一瞬でも気を許せばたちまち致命傷を負わずにはおかない野獣か、恐ろしい蛇か、悪霊のような邪な力のなかを歩きまわっている人のそれ」であった。庭仕事のような「人間の労働のうちでも最も単純無汚なもの」に従事する人にしては奇妙な態度だとは思いながら、ジョヴァンニは彼のことを現代のアダムではないかと考えるばかりであった。そういえば娘のピアトリスの行動

も不可解ではなかったか。父親の博士が「厚い手袋」や「マスク」で身を固めていても近よれないとあきらめた「すばらしい植物」に平気で接近し、それに「妹」と呼びかけるばかりか、甲斐々々しく手入れにいそしむという有様であった。大体、この「庭園」の植物類とラパチニ博士との間には「親密さらしいもの」は何一つとしてなかったのに、娘の側のこの振舞いはどう説明すればいいのか。異常な興奮をおぼえたジョヴァンニ青年が「ゆたかな花と美しい娘」の夢をみて、「花と乙女とは別物であったが、それでいて同一であり、両者の姿にはなんともいえぬ危険がはらんでいた」と感じるのも無理からぬことであった。

ジョヴァンニはラパチニ博士の「庭園」を「一眼でも見る気になれば、なにか醜怪なもののために視力がやられてしまうのではないか」と感じながら、しだいにピアトリスと近づきになってゆく。が、奇妙な事件がつつぎに発生する。ピアトリスが「類似」しているばかりか、「親しげな抱擁」をみせていた「豪華な植物」の枝からしたたり落ちた樹液のために、通りかかったトカゲはたちまちのうちに死んでしまう。「ラパチニの美しい娘」の吐く息を吸った蜜蜂は、あっという間に足元に息たえる。窓辺からジョヴァンニが投げた花束は、娘の手にとられたかと思うと、新鮮さを失ってしまうかにみえる。こうした「庭園」の不思議を目撃した彼は、そのままパデュアの町から逃げ出してしまうか、ピアトリスについて常識的な見方をする以外はあるまいと考える。「抜け目ない空想力」はもっているとしても「深い心の持主」とはいえず、「万事を「普通の経験の範囲内」にもちこもうと考えるジョヴァンニにとって、毒草がおいしげり、奇怪な行動をとる美少女のいる「庭園」は、異常な世界、非現実的な世界としか考えられない。

ピアトリスとの交渉において、ジョヴァンニが「彼女の性質にまつわる暗い憶測で悩んだ」ことを、ホーソンはくりかえし指摘している。やがて青年はラパチニ博士の「庭園」に入りこむ機会に恵まれ、二人の間に愛が芽生える。彼らには「運命」の力がはたらきかけているようで、「庭園でのピアトリスとの

出合いは、もはやジョヴァンニの日常生活における偶然事ではなくなった」と説明される。にもかかわらず、彼は娘の実体についてたえず迷いつづける。一体彼女は何者なのか、という疑問が彼を悩ますのである。「天使」なのか「悪魔」なのか、と問いつづけるのだ。彼女と姉妹関係にあると思われる植物類が「もはや神の創造物でなく、人間の狂った想像の怪物めいた産物」であるように、彼女もまた非人間的な存在ではないのか。かと思うと、彼女がまったくちがった印象をあたえるときもある。彼女はいかにも「ほがらかで」、若者との交渉から、「文明世界からやってきた航海者と会話している孤島の乙女が感じる気持ちにも似かよった純粹の喜び」を味わっているかにみえる。彼としても「子供に」対するような気持ちでピアトリスに接することになり、「兄」のように語りかけては、彼女が「実に人間的で処女らしい」と感じるのである。こうした矛盾したジョヴァンニの反応に、僕らは理想郷ともいうべき「庭園」が毒されているのを発見したアメリカ人の当惑を読みとることができるのではないか。ピアトリスが強くつかんだ手の甲に「紫色の跡」が残るという異常さにもかかわらず、彼女を「人間的」と考え、「その性質にやさしい女性的な要素がすべて備わっている」と思いこみ、「単純で、自然で、きわめて愛情深く、正直な人間」という印象を抱くのは、やはり「庭園の神話」という理想に眼がくらんで、現実の正しい姿を見ようとしないことを物語っている。いや、そう言い切ってしまうまえに、毒性にあふれた人工庭園のもつ意味を考えておかねばなるまい。

ここで改めてくりかえすまでもなく、ラパチニ博士の「庭園」は彼が科学的な目的のために作り出したものであった。そこに咲き乱れる植物類がすべて毒草であり、ピアトリスまでも毒物で育てられた女性であることを、読者は知られることになる。それにしても、ラパチニ博士とはいかなる人物なのか。彼は医者でありながら、「人類よりも科学のほうにはるかに興味をもっている」と説明され、「患者はなにか新しい実験の材料としてしか興味をひかない」とも書かれている。彼は「彼の蓄積された知識の大きな山にケシ粒ほどの知識を

つけ加えるために」みずからの生命だけでなく、他人の生命をも犠牲にしかねない人物として読者に紹介されている。だが、僕らがこの人物について注目せねばならぬのは、なによりも彼の“libido sciendi”，つまり知識欲にほかならぬ。もちろん『ラパチニの娘』全体が、この“libido sciendi”を中心主題としているなどと主張するのではない。そうした見方が偏ったものであることは、すでに最近のホーソン研究が明らかにしている事実である。⁽¹⁰⁾さらにまた、このラパチニ博士が、ホーソンの他の主人公、たとえばチリングワース、エイルマー、イーサン・ブランドなどと共に「許し得ざる大罪」(the Unpardonable Sin)をおかした人物のひとりであることも否定できない。知識を知識のために追求し、「人間の心の神聖さ」を踏みにじる行為を、そう呼ぶことができることはここで論じたるまでもないであろう。⁽¹¹⁾

だが、ラパチニ博士をホーソンの作品にしばしば姿をみせるファウスト的人物のひとりに数えあげる学者のいることも、⁽¹²⁾この「知識欲」という点と切りはなして考えることはできないではないか。大体、ファウスト的な知識欲という点になれば、これが人類の文明の進歩のために欠くべからざる要因であることを認めねばなるまい。この「知識欲」がなかったとすれば、人類は牧歌的な平和をたのしむことはできても、ついにエデンの園をあとにすることはなかったのではないか。すくなくとも、ホーソンの世界において、ラパチニ博士的な行為を「許し得ざる大罪」と呼ぶのは、あの「庭園の神話」を価値判断の基準としているためと言い切ってもよい。ここで思い出すのは、レオ・マークス教授の卓抜した『イーサン・ブランド』論である。教授はこの物語の結末において、主人公が自殺するのは「人類のファウスト的衝動」が取り除かれることを意味し、このあとにはじめて牧歌的なヴィジョンが導入されてハッピーエンドとなることを指摘していた。⁽¹³⁾『ラパチニの娘』の場合、冒頭でいかにも美しい「庭園」のイメージがちりばめられたあと、その「庭園」が実はラパチニ博士の「ファウスト的衝動」のために毒されていたことが判明する。ここでの「庭園」が「アメリカのイメージ」であることはすでに触れておいた。とすれば、

毒された庭園とは、牧歌的なハーモニーを失ったアメリカ、科学文明の洗礼を受けて機械化されているアメリカを意味しているとは考えられないだろうか。

さきにジョヴァンニの混乱ぶりを語ったとき、彼がビアトリスを一方では「天国の天使」とみなすと同時に「人間の狂った想像力の怪物めいた産物」とも考えていたことを指摘しておいた。きわめて興味ぶかいことに、ジョヴァンニから正体を問いつめられた彼女が、自分自身を「恐ろしいもの」であることを認め、「あわれなビアトリスのような怪物」(such a monster as poor Beatrice)という言葉の口にしてているが、この「怪物」のイメージもまた、ラパチニ博士の「庭園」の機械化を物語っていると考えられる。というのも、ホーソンの同時代のアメリカ人一般が、機械文明の恩恵を受けながら、同時にまた機械のことを「鉄の怪物」(iron-monsters)とか「この力強い怪物」(this mighty monster)などといったイメージでとらえていた事実を忘れることができない。機械が牧歌的なアメリカ的風景の破壊者であったという意味に解釈できるのであり、それが「恐怖のプロトタイプ」としてアメリカ人の想像力にはいりこみ、「フランケンシュタインの怪物」となっていた事情⁽¹⁴⁾を理解することができるかもしれない。僕のみるところでは、こうした19世紀半ばのアメリカ人の機械に対する反応が『ラパチニの娘』において、象徴的にとらえられていると考えられる。この短篇において、「自然の秘密」に通じ、「科学」の力で娘を「並みの女性」とちがう人間に改造したラパチニ博士が「フランケンシュタイン」であることは言うまでもない。そして、「毒性」にあふれ、「一息で強大な相手をしずめることのできる」ビアトリスが「怪物」として登場していることは、機械を「恐怖のプロトタイプ」とみる態度の反映と考えることも可能ではないだろうか。結局のところ、「庭園」のなかに「怪物」を発見したジョヴァンニの混乱を、そのまま牧歌的なアメリカ的風景のなかに侵入する機械文明のまえにたたずむアメリカ人一般の混乱に読みつなぐことができるのではないか、と考えたいのである。

ここでホーソンをとりまいていたアメリカの現実について論じる余裕はな

い。しかし、アメリカ経済が飛躍的に発展しはじめた時期が1840年ごろであったこと⁽¹⁵⁾を思い出せば、1844年に発表された『ラパチニの娘』に、そうしたアメリカの変貌を跡づけることも不可能ではあるまい。さらに「1830年以後、ニューイングランドでは生活が変わってしまった」といわれ、「社会的・経済的・宗教的動因」の「再構成」が行なわれていたことも指摘されている⁽¹⁶⁾。ニューイングランドを中心とする産業革命の動きにも注目せねばなるまい。僕らの主人公ジョヴァンニがイタリアの「南部」からやってきたという設定は、彼がアメリカの「北部」であるニューイングランド周辺の「機械化」を目撃していることを意味しているというのは、いささか冗談すぎる発言になるであろうか。

それはともかく、僕は物語の結末近くにみられる場面に読者の注意をうながしたい。ラパチニ博士が「美しい青年と少女」を「勝ちほこった表情」で眺めながら立ち、「両手を子供たちに祝福をあたえている父親のような態度でさし出している」場面である。しかも、これの背景になっているのは、「現代世界のエデン」である。この象徴的な場面について、フォーグル教授は「新しく創造されたアダムとイヴをエデンの園で祝福している神のパロディーがある」と書いて⁽¹⁷⁾いる。ラパチニ博士はアダムかも知れないというのがジョヴァンニの最初の印象であったのだが、実は彼自身が「現代世界のエデン」のアダムの役割をあたえられていることになる。しかも、このエデンの園には毒性があふれ、アダムとしてのジョヴァンニは「新しく創造された」にちがいないとしても、身体中にピエトリスと同じ毒物が注入されているという意味においてである。いかにも皮肉きわまりないアダムぶりといえるのではないか。

実はこうした一見さりげない「パロディー」に僕が眼をとめるのは、このジョヴァンニの姿そのものが、R.W.B.ルイス教授のいわゆる「アメリカ的アダム」(the American Adam)の「パロディー」であることを指摘したいからである。教授によれば、19世紀半ばのアメリカにおいて、理想的なアメリカ人像は、「新しい歴史の出発点に立つ、英雄的な無垢と龐大な可能性をもった人物」としての「アメリカ的アダム」であ⁽¹⁸⁾った。このイメージが当時のアメリカ

人に強くアピールしたことは事実であるとしても、それがまた「恰好の単純さで、アメリカ社会やその政治的運命に関する楽観的な考え方を表明していた」⁽¹⁹⁾ことも認めねばなるまい。こうした「アメリカ的アダム」の楽観性をあばき出してみせるのが、『ラパチニの娘』におけるホーソンの意図であったと僕は考えたい。

ジョヴァンニはみずから「毒された」アダムとなったことを発見したとき、あくまでもすべてが「普通の人間の範囲内にもどるという希望」を捨てることができない。そこで彼は「ボルジャ家の猛毒でも無害にしよう」解毒剤をゆずりうけて、これをビアトリスに飲ませることになる。このジョヴァンニの解決策は二重の意味で重要である。彼は解毒剤をのませることで、ビアトリスを文字通りの「天使」にすることが可能であると考えている。彼の動機は「庭園の神話」の復活であったといってもよく、「無垢な」アダム的世界への憧れがはたらいていたかもしれない。だが、いかにビアトリスが「怪物」であるとしても、それはもはや除くことのできない「怪物」ではないのか。この「怪物」が「機械文明」の別名であるという立場をとるかぎり、彼女の毒性を消してしまおうとすることは、「機械文明」そのものを否定し、時間の流れを逆行させることを意味していることになる。と同時にまた、あの解毒剤は科学者バグリオニ（Baglioni）から貰ったことも忘れてはならない。実はあのアメリカのイメージともいえる「庭園」を毒していたのが機械文明であったとすれば、その毒性を取り除くために「科学」の力を利用するというのも虫の良すぎる態度ではないか。「科学」以前の世界を実現するために「科学」の力を利用するというのは、いかにも矛盾した方法であると考えられる。こうしたジョヴァンニの態度は、結局のところ、一方ではエデン的な幸福を追求しながら、同時にまた他方では機械文明の恩恵をこうむろうという、いかにも楽観的なアメリカ人一般の態度を反映している。バグリオニの解毒剤をのんだビアトリスが息たえるのは、そうした楽観主義に対するホーソンの否定的な姿勢を物語っていると僕は主張したい。

ここで『ラパチニの娘』におけるバグリオニの重要性にふれておこう。ジョヴァンニにラパチニ父子の正体をあばいてみせたのはこの人物であったが、彼がジョヴァンニと同じようにすべてを「普通の人間の範囲内に」もどすことができると考えているのも興味深い。ということは、彼の科学力でピアトリスを普通の身体にもどし、毒性のない「現代世界のエデン」の可能性を信じていることを物語っている。この意味で、僕は『あざ』の主人公エイルマーとの類似性に気づかざるを得ない。エイルマーは妻を「あざ」のない完全な美の持主とするために、あらゆる手段を――科学的手段を用意する。彼がその「あざ」を「原罪」の象徴とみなしていたことは、当然の連想から、彼が人類の墮落以前のエデンの世界に憧れていたことを物語っているわけで、ここには「庭園の神話」が陰画の形でうかびあがっている。しかも、妻のジョージアナが完全な姿になった瞬間に息たえることは「現代世界のエデン」の実現が不可能であることを示していると考えられる。ジョヴァンニを通して行なわれたバグリオニの実験は、ピアトリスをもとにもどすという所期の目的に関するかぎり失敗におわったといわねばなるまい。『ラパチニの娘』の結末における彼の嘲笑はラパチニ博士にむけられただけのことであって、読者としてはみずからの力で、「アメリカ的アダム」好みの「無垢」を実現できると考えた彼の楽観的な態度を見落としてはならない。その点からいっても、バグリオニはジョヴァンニと同じカテゴリーに存する人間、つまり「アダムのヴィジョン」のゆえに現実を見あやまったアメリカ人の典型というほかないのだ。

いずれにしても、『ラパチニの娘』はアダムのアメリカ人の楽観性批判を主題にしていると僕は考えるのだが、ここで注意する必要があるのは、ホーソンのピアトリスの性格規定に曖昧性がみられるという点である。というのも、彼女が父親のために奇型的な人間、毒性にあふれた「怪物」にされていることは事実であるが、同時にまたホーソンは、ジョヴァンニの印象とはまったく別個に、作者自身の感想として彼女が「真実そのものの光」のような女性であったことを、くりかえし強調している。このことは H.H. ワゴナー教授の「ピアトリ

スの本質的な純潔さに関するヒントはホーソンによって直接語られている⁽²¹⁾」という評言をもち出すまでもないだろう。ジョヴァンニには結局「怪物」としか思われぬ彼女に、実は善と悪の両面があったということである。きわめて複雑な実体をそなえたピアトリスを創造した事実、ホーソン自身の機械文明に対する「曖昧性」があらわれているとは考えられないか。アメリカが機械化されることは、たしかに「庭園」としてのアメリカのイメージを破壊することになる。しかし、逆に文明の進歩は幸福の追求というテーマと深くかかわっているのではないのか。美しい魂をもつ怪物ピアトリスとはいかにも矛盾しているが、この矛盾は破壊者であると同時に恩恵者であるというアメリカ文明の矛盾ではないのか。ホーソンはそれを解決することなく、矛盾を矛盾として『ラパチニの娘』⁽²²⁾に表現したのではないか。

ところが、同時代のアメリカ人は、あのアダム的アメリカ人はどうか。この矛盾を一元的に解決しようとしているのではないか。一方で科学文明の恩恵を受け、他方でエデン的世界にあこがれている態度が、ジョヴァンニにあらわれていることは先きにふれておいた。ルイス教授のいう「アダム的アメリカ人」の特性が「英雄的な無垢」と「龐大な可能性」であったことを思い出してほしい。「無垢」は牧歌的な自然の世界と結びつき、「可能性」は機械文明のそれと考えられるのではないか。とすれば、この二つの特性を矛盾なく身につけているアダム的アメリカ人——『ラパチニの娘』におけるジョヴァンニやバグリオニはホーソンの「曖昧性」とは無縁の人間といってよかろう。死に際のピアトリスがジョヴァンニに言う言葉、「それにしても、はじめから貴方の性質には、私のよりももっと毒があったのではないのでしょうか」に、同時代のアメリカ人の楽観主義に対するホーソンの批判を読みとりたい。ピアトリスの死は、「可能性」と「無垢」とを同時に実現しようという態度に対するホーソンの断固たる否／＼であったといえないだろうか。

（大学時代にはじめてホーソンの面白さを教えてくださった甲元教授の退官記念号に、このつたないエッセイを寄稿できるのは、僕にとって大きな喜びであ

ることを附記したい。)

注

- (1) R.H. Fogle, *Hawthorne's Fiction* (1952), p. 91; Roy Male, *Hawthorne's Tragic Vision* (1957), p. 55; R.B. West, Jr., *The Short Story in America* (1952, Gateway Edition), p. 10.
- (2) Cf. M. Bell, *Hawthorne's View of the Artist* (1962); F.C. Crews, *The Sins of the Fathers* (1966).
- (3) ここでいう「文化的象徴」については, Cf. R.A. Hall, Jr., *Cultural Symbolism in Literature* (1963), esp. Ch. 1.
- (4) V.L. Parrington, *Main Currents in American Thought* (1930), pp. 446, 450.
- (5) Charles Feidelson, Jr., *Symbolism and American Literature* (1953), p. 7.
- (6) Harry Levin, *The Power of Blackness* (1958), p. 85.
- (7) Lionel Trilling, *The Liberal Imagination* (1950), pp. 61—62.
- (8) H.H. Waggoner, *Hawthorne* (1955), p. 102; Fogle, p. 98.
- (9) Cf. H.N. Smith, *Virgin Land* (1950, Vintage Book); Leo Marx, *The Machine in the Garden* (1964), Ch. III.
- (10) Waggoner, pp. 101—2; Male, p. 55.
- (11) Cf. J.E. Miller, "Hawthorne and Melville: The Unpardonable Sin," *PMLA* (March 1955); L.J. Fick, *The Light Beyond* (1955), pp. 135—140.
- (12) W.B. Stein, *Hawthorne's Faust* (1953), pp. 92—93.
- (13) Marx, p. 277.
- (14) Bernard Bowron, Leo Marx, and Arnold Rose, "Literature and Covert Culture," J.J. Kwiat and M.C. Turpie, eds., *Studies in American Culture* (1960), p. 90.
- (15) Cf. W.W. Rostow, *The Stages of Economic Growth* (1960).
- (16) Herbert Gorman, *Hawthorne* (1927, 1966), pp. 9—12.
- (17) Fogle, p. 99.
- (18) R.W.B. Lewis, *The American Adam* (1955), p. 1.
- (19) D.E.S. Maxwell, *American Fiction* (1963), p. 141.
- (20) Cf. Marx, p. 226.
- (21) Waggoner, p. 109.
- (22) ホーソンの同時代人の「機械」への反応については, Cf. Bowron *et al.*, "Literature and Covert Culture," pp. 88—93.

